慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	端午風物詩語小考
Sub Title	A study about poems of "Duan-wu"
Author	許, 曼麗(Hsu, ManLi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.39- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

端午風物詩語小考

許　曼　麗

序　言

端午節の風物を詠む詩は意外と少ない。端午節には多種多様な禁忌があり、これらの禁忌と共に様々な物語が語り継がれてきた。五色の糸で香袋を縫っては体に付けたり、粽を食べたり、雄黄酒を額に塗ったりする。または艾草で人形（艾人）を、菖蒲で蒲剣を作って家の扉に飾る。そして、「龍舟競渡」がある。無論、多くの禁忌は既に形式的な行事になっている。が、形式とは言え、現在なおも繰り返されている。端午日に関する記載はかなり古い時代から始まっている。周處（二七九年没）の『風土記』に

仲夏端午、烹鶩角黍、端、始也、謂五月初五日也、又以菰葉裹黏米煮熟、謂之角黍。

（初夏の端午日には鶩（あひる）を烹、角黍（ちまき）を食べる。端は始め也、五月最初の五日である。また、菰の葉で黏米（もちごめ）を裹（くる）み、熟

すまで煮る。これを角黍と言う。）

とある。約三百年後に、『荊楚歳時記』（五四六年成、宗懍著）と『玉燭寶典』（五九？年成、杜臺卿（五九九年頃没）著）には、たくさんの行事が付け加えられている。[1]『北堂書鈔』と『初学記』はこれらの記載を継承し、時代が下がるにつれて、歳時記や雑記、類書などに出る端午節に関する記述は膨らむばかりで、唐末五代の作とされる韓鄂の『歳華記麗』[2]では、五月五日についての記述は三十以上も数えられる。このように詩の素材に成りうる端午日の行事や言い伝えは豊富にあったにも関わらず、端午詩は唐末五代まで極めて少ない。『藝文類聚』には一首、文苑英華には二首、明の張之象編纂の『古詩類苑』には一首もなく、『唐詩類苑』には端午、競渡それぞれ七首ずつの収録に止まる。宋の蒲積中の撰である『歳時雑詠』の中、唐までの巻にはわずか十三首しかない。これらの書物に取り上げられた詩は互いに重複するものが多く、その重複したものを除けば、実際は十五首に過ぎない。端午節にまつわる風習、言い伝えの多さに比して、詩作の数はいかにも少な過ぎる。しかも、菖蒲、屈原、又は屈原に因む言葉を端午詩に詠む例もこれまた少ない。これは何故だろうか。本稿は唐五代の端午・競渡詩の検証を通して、我々が馴染み親しんでいる故事、食物、行事は何時から、どのように詩に表されているのか、更に、唐以降の詩作にも触れ、端午風物詩の詩語成立の背景、変遷等を考察し、詩作の少ない要因をも探ってみたい。

一

まず、最も時代の古い端午詩と思われる梁の王筠[3]の「五日望採拾詩」を見てみよう。

裁縫逗早夏、點畫守初晨。綃紈既妍媚、脂粉亦香新。
長絲表良節、命縷應佳辰。結蘆同楚客、採艾異詩人。
折花競鮮彩、拭露染芳津。含嬌起斜盻、歛笑動微嚬。
獻璫依洛浦、懐珮似江濱。須待恩光接、中夜奉衣巾。

（初夏のお出かけのために綺麗な白い絹で服を仕立て、新しい粉おしろいも良い香りを漂わせている。五色の糸や長命縷は何れも良節佳辰の表れである。蘆を楚客と同じように結い、艾草を採るときに詩人（宗文度）のような拘りはない（人の形をしているかどうかを）。競って鮮やかな花を折っては花に付いている露を拭きとろうとして、（その手ぬぐいが）花の香りに染まってしまう。横目でちらちら人を見る様は愛嬌たっぷりで、眉をひそめて笑いを堪えようとして、（堪えきれずに眉が）微かに動いているのが見える。（採拾を見ているこの私は、）洛浦の神に献上するに相応しい耳飾り（才能）を持っているし、江濱を彷徨う屈原と同じような珮（忠心）を持っている。何時か天子の恩澤に接することが出来たら、なりふり構わず自分を日夜（天子のために）奉りささげよう。）

※詩の訳は大意である。以下同。

歐陽詢の撰『藝文類聚』（六百二十四年成）五月五日の項に、「夏小正」を引いて、「この日は衆薬を採集し、以て毒気を駆除する」[4]と述べている。題の「採拾」はこの衆薬を採集する習慣を意味し、詩中の採艾折花がこの採拾に当たる。長絲命縷は共に長命縷のことを意味する。長命縷はまた、百索、續命縷、五色縷、五色糸、朱索といい、臂に巻いて、

長命を祈するものである。この長命縷は、古く漢からの習慣であると言われている。漢應劭『風俗通』曰、「五月五日續命縷、俗説益人命」と、古い歳時記にはこの記述（現存の『風俗通』にはこの記述は見あたらないが）がよく引用される。五月五日の行事ではないが、『西京雑記』（晋葛洪）には、漢の高祖の愛妾戚夫人の侍兒賈佩蘭が宮廷を出て、扶風の人である段儒の妻になったのち、宮中の生活を回顧して、

以五色縷相羈、謂為相連愛。八月四日出雕房北戸竹下圍碁、勝者終年有福、負者終年疾病、取絲縷就北辰星求長命乃免。

（五色の糸で互いに結びあい、これを相連愛という。八月四日に彫房（彫刻を施している部屋）の北側を出て、竹林で囲碁をさす。勝った人は一年間福があり、負けた人は終年病気に見舞われる。絲縷を取って、北辰星に長命を乞いたら、免じられるという。）

とある。この記載を文字通り受け取れば[5]、長命縷は既に漢の高祖の時代に存在したのである。また、後漢書・志・禮儀の桃印についての記述文中にも、「（前略）五月五日、朱索五色印為門戸飾、以難止悪氣。」とある。朱索、即ち長命縷であるが、後漢では、既に五月五日に大事なものとして登場していることが分かる。詩中の楚客は楚の地方からの客人（移住者）を意味する。この詩はどのような背景で詠まれたのか、今は知るよしもないが、楚人を客と言っているあたりから、場所は荊州周辺ではないと考えられる。楚は俗信を重んじるところであるので[6]、楚地においてならば、五月五日の行事はもっと信仰に満ちあふれているのではないかと想像される。古くから五月は「悪月[7]」である故、禊ぎをし、

邪を払い、病瘟から身を守ろうという真剣なものであったはずだが、この王筠の一首からは、それが見受けられない。良節、佳辰と言う言葉を通した景色からは、諸々の手段を使い、邪悪を追い払わなければならないという悪月のイメージが全く感じ取れないのである。節句に因んで「採拾」をしているものの、楚人の習慣をまねたりするあたりからは、何処かのんびりした空気が漂い、女性達のお喋りと笑い声が伝わってくるように思えるのである。王筠が生活した社会は、古代より伝わって来た行事の呪術的な要素がだいぶ褪色し、遊興的な要素が段々と高まるようになったと考えられる。王筠もまた自分と異なる風習を目のあたりにして、珍しく思ったのであろう。

ほぼ同時代に魏收[8]の「五日詩」では次のように詠まれている。

麥涼殊未畢、蜩鳴早欲聞。喧林尚黄鳥、浮天已白雲。
辟兵書鬼字、神印題靈文。因想蒼梧郡、茲日祀陳君。

（麦の収穫はまだ終わっていないのに、早くも蝉の鳴き声が聞こえてきたりする。鶯はまだ林の中にぎやかに鳴いているのに、白雲はすでに空に浮かんでいる。（このような不安定な陽気の五月に）辟兵符に鬼も遠のくような字を書き、神印に霊験のある文を記す。この日に因んで昔蒼梧太守のことを思い出し、この日は陳臨を祭祀する日なのだ。）

辟兵はお札の類で、赤符、辟兵繒、厭兵繒ともいい、胸元につけると（五）兵または病気を避けることが出来る、という。つまり、一種のまじないである。この時代、社会は非常に不安定な状況にあり、絶えず起こる兵馬の乱に、庶民

百姓達は常に恐怖の淵を彷徨わせられた。辟兵繒、厭兵繒などを求める心理は時代を反映していると言えよう。一方、人々の移動は頻繁になり、風習なども東西南北のものが融合の道をたどる時代でもあった。末二句は『初学記』五月五日の記述、事対に「祠陳」というのがあり、その注に、「謝承の後漢書曰く、陳臨が蒼梧太守である時、誠意を持って物事を処理し、孝悌を以て人々を導く。臨が亡くなった後、蒼梧郡は五月五日に東城門上で、小童に潔服して舞いをし、臨を祠る。」とある。今の後漢書にはこの記載は見あたらないが、徐堅が『初学記』を編纂する時存在した書物なので、魏収はそれを読んだのであろう。魏収は北魏書の編纂するぐらい、文才に富み、書物を博覧する人物である。王筠と魏収のこの二首の詩に見る、端午日に百草を採取したり、長命縷や、辟兵符などを付ける古い習わしは、どれも漢代の記録を拠り所にしている。しかし、王筠、魏収と同時代の人による書物の『續齊諧記』や『荊楚歳時記』に初めて記録される楝葉五綵纏筒[9]（竹の筒を楝の葉で包み、五色の糸で巻く）や菖蒲酒、屈原に由来する競渡などは登場しない。何故だろうか。その理由を探るため、まず次の時代の端午詩を見ることにしよう。

二

さて、唐代の端午詩はどのように詠まれているのだろうか。全唐詩からたどっていこう。本稿で取り上げる全唐詩の端午風物詩は、幾つかの詩語をグループに分けて検索し[10]、重複したもの、端午節とは無関係な内容のものを省き、整理したものを使う。

まず「端午、午日、五月五日」のグループ（以下端午詩という）には二十二首、「競渡（舟）」のグループ（以下競渡詩という）には二十一首を数えることができる。では、端午詩のグループから見てみよう。端午詩の内訳は次の通りで

ある。長命縷五色糸の類を詠んだのが七首、賜衣が四首、屈原が四首、競渡が三首、鋳鏡が二首[11]、艾蒲、浴蘭が各一首である。この他、「角黍、粽」を詠んだものも数首あるが、何れも屈原（霊均）を詠む詩に登場している。

唐詩に初めて「端午」という語を使ったのは玄宗皇帝である。開元十五年（西暦七一七年）玄宗皇帝が武成殿に群臣を招き、端午の宴を開いた[12]。その宴会において、明皇帝自ら詠んだ「端午三殿宴群臣探得神字」という詩が始まりである。その序文に次のような記述がある。

（上略）庖捐悪鳥、俎獻肥龜、新筒裹練、香蘆角黍。恭儉之儀有序、慈惠之意溥洽。（中略）驗方術於經記、綵花命縷、觀問遺於風俗、感婆娑於孝女、憫枯槁之忠臣而已哉。歎節氣之循環、美君臣之相樂。（下略）

傍点の箇所はいずれも諸書に書かれている端午に因む言い伝えである。「庖捐悪鳥」は漢書巻二十五郊祀志に「古（いにしえ）、天子は常春（よく）に解祠（かいし）する。黄帝が祠するに、梟（ふくろう）と破鏡（はきょう）を用る」の記載に顔師古らが「解祠とは祠祭を以て罪を解き福を求めること」、「梟は悪逆の鳥なり」、「漢（帝）は東郡に梟を送らせ、五月五日に梟羹を作り、以て百官に賜る。悪鳥である故これを食す」と注を施している。その他は何れも『風土記』や『續齊諧記』、『荊楚歲時記』、『玉燭寶典』などに典故[13]を求められる。孝女は曹娥のことで、後漢書巻八十四の列女傳に名を挙げられている。忠臣は言うまでもなく、屈原のことである。

『荊楚歲時記』の成立（五四六年と推定されている）から約百七十年、歐陽詢の『藝文類聚』や徐堅の『初学記』などの成立も歲時記の記載を広める役に立ったかと思われ、この時代では、端午にまつわる物語、言い伝えは文人の中で

は共通の常識になっていたと考えていいと思う。しかし、この宴会で詠まれた端午詩には「長命縷」ばかりが多用される。宮廷の宴会において詠む詩はやはり天子の賢徳を頌え、天子の恩を崇めるものがどうしても多くなる。張説がこの宴会で「端午三殿侍宴應制探得魚字」という詩を詠んでいる。中に「願齋長命縷、來續大恩餘。」と言い、まさに天子の恩を詠み込んでいる。張説は睿宗景雲二年（七一一年）に宰相になるが、玄宗即位翌年の七一三年に相州刺史に左遷される。その後岳州刺史を経て、朝廷に戻され、七一四年に再び右丞相となったが、七一七年には中書令を罷免される。しかし、七一七年のこの宴会には参加出来る立場にあったので、天子の恩をとりわけ感ずるところがあったのではないかと想像される。

竇叔向の「端午日恩賜百索」もまた心から天子の恩に感謝している。

仙宮長命縷、端午降殊私。事盛蛟龍見、恩深犬馬知。餘生儻可續、終冀答明時。

（仙宮の長命縷を端午の日に（天子が）特別に自分に賜ったのだ。事を盛大にやれば、蛟龍にも伝わるが、この恩の深さは犬馬にさえ分かる。余生を長らえることが出来たら、一生をかけてこの恩に報いよう。）

この長命縷は天子からの賜り物である。宴会の席では度々天子の恩賜が行われるが、年節ごとに天子から臣下に官位の等級にあわせて、衣類や装飾品など品物を賜る習慣は古く漢の時代からあった。この「端午賜衣」は、漢章帝が最初に行ったという。[14] 唐代にこの五月五日も節句の一つに加えられ、端午の日にも天子から服などを賜るようになったのである。乾元元年（七五八年）五月杜甫が左拾遺の地位（といっても高いものではないが）にあった時、衣を天子より賜り、

杜甫はことのほか感激して、「端午日賜衣」という詩を成している。

宮衣亦有名、端午被恩榮。細葛含風軟、香羅疊雪輕。
自天題處溼、當暑著來清。意内稱長短、終身荷聖情。

（（天子より賜る）宮衣の名簿に自分の名が有ったのだ。端午に（特別な）恩栄を授かった。細葛（さいかつ）は風を含んでいるかのように軟らかい、香羅（こうら）は雪を畳み重ねたように軽い。天子より賜ると記された墨跡はまだ溼（うるお）っている。暑いとき着ても清々しい。長短もまた称（はか）ったかのようにちょうどいい。この聖情を終身荷なおう。）

※細葛、香羅はいずれも絹の類である。

『文苑英華』巻五九二から、五巻に渉って、天子から「賜物」の栄を受けた人々の「謝書」が夥しく収録されている。その中、端午の賜に感謝する書状もしばしば目にすることが出来る。ただ厳密に言うと、上記の杜甫の詩を含めて、これらの詩は端午日に行われる宮廷行事を詠んでいるだけで、端午風物詩に数えることはできないと考える。やはり、より多くの風物が詠み込まれるのは庶民行事としての端午詩であり、そして、往々にして詩人の人生観、感慨、或いは悟りが付加されている。下記のような詩が代表となろう。

端午日　殷堯藩

少年佳節倍多情、老去誰知感慨生。不效艾符趨習俗、但祈蒲酒話昇平。

鬢絲日日添頭白、榴錦年年照眼明。千載賢愚同瞬息、幾人湮沒幾垂名。

（若い時、端午は佳節に思い、心は浮き浮きしていたものだが、老いて心に生じたこの深い感慨を誰が知ってくれるだろうか。艾符など習俗に趨ることはしない、願わくば、蒲酒を手にしながら、太平の世を語る。日に日に白髪は目立つが、節物は年々同じように鮮やかな色を見せる。長い歳月のなか、賢も愚も瞬く間に故人となり、後の世まで名を残す人、隠没する人は幾ばくだろうか。）

徐鉉の「和李秀才端午見寄」も同種の感情を見せている。

角黍菖蒲酒、年年舊俗諳。采衣君自樂、白髮我何堪。（下略）

（角黍と菖蒲酒、年々旧俗を諳んじる。彩った服を着て、君は自ら節句を楽しむが、私ときたら、目立ってくる白髪には何をすることも出来ないが……。）

日常生活が詩に反映され、節句の行事、習わしを詩人自ら行って詠んだものが真実味を感じさせてくれるのである。節句に因む古人の境遇と自分のそれとを照らし合わせ、感ずるところがあって詠んだものがまた深い境地に我々を誘う。我々は詩を読む時、詩語の典故のみならず、詩語に内含される詩人達の感情をも学習するのである。

三

では、競渡を歌う詩を見よう。前述したが、全唐詩に題または詩文中に「競渡（舟）」という語を含む詩は二十一首ほどある。中には、屈原に言及したものが五首あり、また、端午の日に行われた競渡ではないと考えられるものが五首含まれている。唐代の競渡詩はすべて端午日に行われた競渡を歌ったものではないようである。南方において、毎年端午日の行事として行われる競渡と天子を楽しませる（又は見せる）ため都城長安あたりの池で行われる競渡とがある。

詩人の手による風物としての競渡詩には張説の「岳州観競渡」がある。競渡が詩に登場する最も古いものと考えられる。[15]

畫作飛鳧艇、雙雙競拂流。俄裝山色變、急棹水華浮。
土尚三閭俗、江傳二女遊。齊歌迎孟姥、獨舞送陽侯。
鼓發南湖汊、標爭西驛樓。並驅常詫速、非畏日光遒。

（土地の人たちは屈原の物語を尚ぶ、江には（天帝の）二の女が川遊びの故事を伝えている。船神を迎えるにみな歌おう、舞をして、波神の陽侯を送ろう。（川辺の祭祀もすみ、競渡の用意はもう整ったのだ。いざ始めよう。）龍や鷁などの絵をあしらった軽快な舟がそれぞれ対になって、江水の流れを振り払って速さを競う。山の色が俄に変わったかのようで、速く、勢いよく漕いだ楫のあたりの水泡は華のように浮かんでいる。太鼓の合図で南湖の汊より発ち、目指す旗は西の驛楼にある。並んで駆けるその速さに驚かせられ、日の光り（光陰）が速く逝ってしまうのを畏れて一所懸命に楫を振ったのではないよ。）

張説は七一五年に相州から岳州に移された。岳州刺史在任中の作であろう。既に諸書に記されている端午の言い伝えは

熟知していたであろうが、張説は元々洛陽の人なので、岳州で観た競渡はかなり新鮮な体験だったのではないかと想像される。天子御覧のための競渡を観賞するではなく、舟子達が物語の代言者として、我こそはと競うこの伝統行事を目の当たりにしてこそ、臨場感溢れる詩が詠めたのだと思われる。

競渡詩で最も有名なのは劉禹錫の「競渡曲」だと思われる。中国の歳時記を紹介する書物が競渡に言及した場合、よく引かれる。かなりの長文なので、ここでは引用を省き、注を参照されたい。[16] この曲は、競渡の由来からはじまり、舟比べの準備、見学客の興奮、舟子達の勢い、そして勝負にかかり、やがて曲終人散。日が暮れ、人々が消え、静まりかえった中、先ほど龍舟を浮かべた川は何もなかったかのように、悠久に東に流れていく、と歌っている。一連の動きはまるで実況中継されたかのように、勇壮な競渡絵巻が躍然と読者の目の前に繰り広げられる。読者まで血が騒いでくる。

競渡詩（一作及第後江寧觀競渡寄袁州刺史成應元）　盧肇

（上略）衝波突出人齊噉、躍浪爭先鳥退飛。向道是龍剛不信、果然奪得錦標歸。

（波を衝いて飛び出るや否や人々は一斉に喊声を出し、波に躍り出て先を争えば、鳥も吃驚して飛び退いていく。（その舟が）龍だと言っても全く信じてくれなかったが、果たして（自分が言った）その舟は錦の標を奪って帰ってきたのだ。）

競渡時在湖外偶為成章　李群玉

雷奔電逝三千兒、彩舟畫楫射初暉。喧江雷鼓鱗甲動、三十六龍銜浪飛。（下略）

（雷や稲妻が瞬時に消え去るような速さで体を動かす大勢の舟子達は、水鳥（鷁）など美しく彩った舟に乗り、綺麗な絵で描かれた楫を持って朝陽を浴びながら猛然と動き出した。太鼓などの音は雷のように轟き、蛟龍をも動かすかのように、川いっぱい喧しい声に満ち溢れている。（その中）三十六艘の龍舟は波を銜（くわ）えるかのように水しぶきの中を飛んでいる。）

競渡　徐凝

乍疑鯨噴浪、忽似鷁凌風。呀呷汀洲動、喧闐里巷空。

（舟子達が水を漕ぎ、押し出した水はまるで）鯨が飲み込んだ波を噴き出すかのようだ。そうかと思えば、忽ち舟は鷁（げき）が風に乗って飛んでいるように見える。浅洲は大勢の見物人が押し合い圧（へ）し合いしているため、動いているように見える。普段賑やかな町がまるで無人の里のようだ。）

表現の巧妙は当然詩人によって違いがあるが、唐代の五日競渡詩は大方このように躍動感溢れるものであった。

競渡は端午日に限って行われる行事ではない。正史には記録は少ないが、幾つか端午日のそれとは異なる競渡を見ることが出来る。例えば、「元和十五年九月穆宗が魚藻宮において競渡を観る」（旧唐書巻十六、新唐書巻八）。同じ場所において、敬宗が寶暦二年（八二六年）の三月と五月それぞれ競渡を観、同年八月、新池でも繰り返している。同じく旧唐書巻二十本紀にに「昭宗乾寧四年三月庚午車駕幸韓建南莊六月己亥帝幸西溪觀競渡」（巻二十）とある。これについて、呉融が「和集賢相公西溪侍宴観競渡」という詩を成している。[17] 端午日の行事と違って、人々の興奮、舟子達の威

勢なり、心臓の鼓動は伝わっては来ず、美辞麗句を並べ立てて成した詩で、如何にも御用の詩作である。李適の「帝幸興慶池戲競渡應制」もまさに「堆砌詞藻」そのものである。

拂露金輿丹旆轉、凌晨黼帳碧池開。南山倒影從雲落、北澗搖光寫溜迴。
急漿爭標排荇度、輕帆截浦觸荷來。横汾宴鎬歡無極、歌舞年年聖壽杯。

この他にも凝碧池で行った競渡を詠む詩を應制の部に見ることが出来る。[18] このような行事がどれぐらいの頻度で行われたのかは不明であるが、旧唐書（新唐書も）によると、穆宗、敬宗、昭宗の代に集中している。また、李紳の「新樓詩二十首」の中、東武亭を詠んだ詩の序言に「亭在鏡湖上、即元相所建。亭至宏敞、春秋為競渡大設會之所。云々」とある。東武亭が位置する鏡湖では、春秋共に競渡が行われたことが分かる。端午でない日[19]に競渡が行われることは、龍舟競渡は「拯屈」に由来したのではないことを物語っている。既に、『荊楚歳時記』に記す競渡の起源について杜公瞻が幾つかの伝説を引いて、「不関屈平也」と言っている。屈原を救うための競渡は後人附会の説であることは通説になっている。競渡の起源はやはり、季節の変わり目の祓禊（水辺の禊ぎ）や竜神信仰に基づく雨乞い、瘟神（疫病神）送りの行事[20]などに由来すると考えられる。或いは呉越地方の水軍の操練なども競渡の成立に一役を買っているように思える。文人達も、屈原は競渡などと関係ないことを承知の上で屈原を詠むことが多い。

一方、民間では、この行事は段々とエスカレートし、色々と弊害が生じるようになる。競渡の季節はまさに農事の最も忙しい時期でもある。この舟比べは、どれくらい害をもたらしたのだろうか。これについて、元稹が「競舟[21]」と題す

る詩を詠み、その弊害を具に描いている。要約すると次のようになる。

楚の俗は力を惜しまず、競舟のため多大な力を費やす。毎年の四、五月、農事の忙しい時期なのに、若者は集まって舟比べの練習をし、技を磨く。その勢いはまるで敵と戦う様子。舟を買うのに、貧乏な人からも金を集める。その舟を祀る様子はまるで祖先を祀るかの如し。（練習のため）水を貯め、そのために堰堤はしばしば壊されて、田んぼもすっかりだめになってしまう。こんなことを何十日も繰り返すので、農事を全くほったらかされてしまう。云々。

この批判に続けて、岳陽の刺史がこの行事を廃止したことをまさに良政であると讃えている。全唐詩に、蕭結の「秧開五葉、蠶長三眠。人皆忙迫、划甚閒船。」[22]というのがある。これも同じく、農事の忙しい時期において、競渡などやる余裕が有ろうかと批判している。少々時代が飛躍するが、清の『欽定授時通考』巻五一に乾隆帝の詩「五日芒種」でもこのような表現をしている。

「（上略）五日天中節物佳、却逢芒種農功促。（略）老農炙背溪田裏、那得閒從競渡船。（下略）」

（五月五日は天中節と言って、いい節句だが、稲麦の種を播く忙しい農時期と重なる。（略）農夫は背を太陽に向け、日に灼かれながら、水田の中で（種蒔きのため）勤しんでいる、競渡の舟を追いかける暇なんぞあるわけがない。）

農事に影響するばかりか、競渡の勝敗を賭け、それにまつわるトラブルもしばしば生じたようである。[23] 競渡はとかく血が騒ぎやすく、勝負事にかかると、人々も気が立って、喧嘩沙汰になりやすい。宋以降は、競渡は唐代より益々盛大に行う傾向にあり、幾たびかの禁止、復活の繰り返しを経て、現代ではこの競渡が端午節の最大のイベントとなっている。

さて、「屈原」について見てみよう。唐代では、屈原は五月五日と関係なく、季節問わずに詩に登場する。屈原はおよそ、中国の歴史上、もっとも知識人に尊敬され、最も愛誦された詩人の一人であろう。「士生一代間、誰不有浮沈」[24]、文人の浮沈は中国の歴史そのものだと言っても過言ではないであろう。浮はとかく儚く、沈はしばしば一生涯である。屈原の境遇、彼の高貴な節操が神化されるほど人々に愛されたことは、詩作においては格好の素材だった。「屈原」と言う固有名詞は、ある時は文人達が方々に流される不遇な自分の代名詞となったり、懐古の詩においては光陰無情に触発される常套表現となったりした。文人達は屈原を通して、己の心を投影したのである。屈原は端午の日だから詩に登場するのではない。

和萬州楊使君四絶句　競渡　白居易

競渡相傳為汨羅、不能止遏意無他。自經放逐來憔悴、能校靈均死幾多。

（競渡は古くから汨羅に投じて死んだ屈原の魂を招くためだと伝えられてきた。それをやめることが出来ないには意味があるのだ。貶謫にあってからはますます憔悴してしまい、このままだと屈原と同じような最後になるのもそう遠くはないのだ。）

この詩からは競渡の喧囂たることがほとんど聞こえてこない。

表夏十首　元稹

靈均死波後、是節常浴蘭。彩縷碧筠粽、香杭白玉團。
逝者良自苦、今人反為歡。哀哉徇名士、沒命求所難。

（靈均（屈原の号）が汨羅に身を投げた後、その日はよく蘭を集め、沐浴する節句となる。色とりどりの絲縷を巻いたり、碧（みどり）の葉っぱで包んだ粽、いい香りをする粳に白玉の団子（実にたくさんの節句ものを用意され、楽しく過ごすものだ）。亡くなった人は相当に苦しんで逝ったのだが、今の人は却って賑やかに祝っている。悲しいよ、孤高な節操を保つため殉死した名士なのに、亡くなっても居場所を求めるのがむずかしい。（そっとしておいてもらいたいものだが。））

競渡の弊害を歌った元稹は、ここでも端午節の行事に対して、やや批判的な見方をしているようである。

唐代には少なかったが、宋代に入ると、端午の風物詩は結構な数になる。屈原もしばしば端午詩に登場するようになる。宋李綱の「重午」ではこう詠んでいる。

誰將佳節號天中、陽極陰生五自重。角黍但能娛幼稚、綵絲那得制蛟龍。

千年沉汨英靈在、萬里浮菖習俗同。逐客有家歸未得、滿懷離恨寄南風。

（誰がこの佳節を天中節と名付けたのか。陽極まれば陰は生まれ、五の日は自ずと重なるものだ。角黍などはただ未熟な人たちを楽しませることは出来ても、綵絲は蛟龍を制することが出来るわけはない。千年以上も前に汨羅に沈んだ屈原の英魂はずっと人々の心に留めており、万里（國の隅々）同じように菖蒲酒を飲む習慣をしている。（自分もこのように平凡かつ不変の日々を過ごしたいところだが）貶謫の身である自分は故郷の家には帰ることが出来ない。胸一杯の別れの辛さを南風に託すよりほかない。）

が、屈原を傷むばかりでなく、屈原に逐客である自分を重ね合わせながらも、屈原を見つめる目線は少しずつ焦点を変えているように見受けられる。どこか、冷ややかな目で見ているような詩も出てくる。張無盡が「端午偶題」にこのように詠んでいる。

孤忠不屈赴湘流、甘與龍逢地下遊。若共蛟龍爭口食、何如附會楚王休。

（孤高の忠臣は時勢に屈することなく、自ら湘江の流れに赴き、地下で龍に逢うことに甘んじた。もし、蛟龍と食べ物を争う結果になることが分かれば、楚王に出されたひまに附会してもよいのではないか。）

晏殊の「端午作」

汨渚沉沉不可追、楚人猶自弔湘纍。靈均未免爭瓊糈、卻道蛟龍畏色絲。

（汨羅の深いところまで沈んでしまい、追う（助ける）ことが出来なかった。そのため、楚人は年々湘のほとりで（屈原を）弔っている。結局、靈均は（蛟龍と）瓊糈を争うこと（運命）から逃れずに、却って蛟龍は色絲を畏れているのだと訴えに出たのだ。）

些か文人の屈折した心情が覗けたように思われる。

四

菖蒲の詩を見よう。五月五日の記述に菖蒲が初めて登場したのは『荊楚歳時記』である。「悪月」であるため、諸々の辟邪の手段が記されている中、菖蒲を細かく切って、酒に浮かべて飲むというのがある。上に述べてきたように、端午詩、競渡詩のいずれも菖蒲は余り登場しない。すでに第二節に出ている殷堯藩の「端午日」が全唐詩唯一の例である。では、菖蒲は全く詩に詠まれないのかと言うと、そうでもない。全唐詩には「菖蒲」を詠んだものは、およそ四十五の詩例を数える。しかし、これらの菖蒲は端午節の風物として詠まれたのではない。詩に詠まれる菖蒲は幾つか異なるイメージを湧かせてくれる。まず、初夏の景色としてよく詠まれる。李賀の「新夏歌」に「刺香満地菖蒲草」とあり、盧綸が「曲江春望」に「菖蒲翻葉柳交枝」と詠んでおり、いずれも孟春から季夏に見る風景である。明李時珍が『本草綱目』に曰、

菖蒲乃蒲類之昌盛者、故曰菖蒲。又呂氏春秋云、冬至後五十七日菖始生。菖者百草之先生者。於是始耕。

菖蒲は耕作開始の大事な徴（しるし）であることが分かる。冬至後五十七日は孟春から初夏に変る季節である。詩人達が菖蒲を詩に取り入れる時は、偶然に目に入った、単なる草花の一つではなさそうである。

菖蒲はまた花が珍しい。『玉臺新詠』に「近代七曲歌」に「菖蒲花可憐、聞名不曾識[25]」とある。唐の施肩吾の「古相思」にこのように言っている。

十訪九不見、甚於菖蒲花。可憐雲中月、今夜墮我家。

（十回訪ねても九回は会えない、菖蒲花を見るより難しい。（その恋いこがれるお方はまるで）可憐なる雲中の月が我が家に堕ちるかのように訪れてくるのだ。）

他にも「菖蒲花可貴、只為人難見」（劉駕「隣女」）「解吟憐芍藥、難見恨菖蒲」（羅隠「倣玉臺體」）など、滅多に見ることが出来ないものとして詠んでいる。蘇轍が盆に植えた菖蒲が突然八、九輪花を咲かせたのに驚き喜んで詩を詠んだ。その詩に、蘇軾は「和子由石菖蒲忽生九花」という詩を唱和している。明の人周祈の撰である『名義考』に「古詩云、菖蒲開花馬生角、甚言菖蒲無花也」とある。詩人達は菖蒲の花の珍しさをしっかりと詩に詠みこんでいる。

また、唐詩に登場する菖蒲は仙人（道士）・長命のイメージが強い。李白には「嵩山采菖蒲者」という詩がある。

神仙多古貌、雙耳下垂肩。嵩嶽逢漢武、疑是九疑仙。我來採菖蒲、服食可延年。言終忽不見、滅影入雲煙。喩帝竟莫悟、終歸茂陵田。

（神仙には古めかしい風貌を持つ人が多く、嵩嶽で漢の武帝が逢ったこのお方も同じようで、長い耳が肩まで垂れている。九疑仙人かと思われた。漢武に、菖蒲を採りに来たのだ、これを服食すれば、年を長らえるのだと言い、言葉が終わると忽ちどこかへ見えなくなってしまい、雲烟に消えたかのように影もない。帝に諭すために現れたのかと思ったが、（武帝は）ついに悟ることもなく、結局は茂陵の田に永遠に眠ることになったのだ。）

詠み人知らずの唐詩に「石上生菖蒲、一寸八九節。仙人勸我餐、令人好顔色」と言い、王貞白の「送芮尊師」に「石上菖蒲節節靈、先生服食得長生。」とある。何れも同じことを詠んでいる。他にも類似の表現がたくさん見受けられ、これらの多くは類書では「道門」または「隠逸」の部に収録されている。

『本草綱目』に李時珍はまた、「抱朴子に云う、服食は一寸九節紫花のものが善とする」[26]と言い、さらに、「應劭風俗通に云う、菖蒲の放つ花を得て食すれば、長年是なり。」[27]と言っている。唐代の菖蒲詩はまさに『抱朴子』や、『風俗通』の記述を忠実に詩に詠み込んだのではないか。「九節菖蒲石上死」（李賀「帝子歌」）然り、「菖蒲花紫茸」（李白「送楊山人歸嵩山」）も然り。端午詩に菖蒲が歌われないのは、唐代では、菖蒲は既成のイメージを持った詩語であり、辟邪としての菖蒲は簡単に端午詩の詩語になりえないのであろうか。そういう意味では、殷堯藩が菖蒲を端午詩に詠み込んだのは一種の創挙と言える。

詩ではないが、菖蒲の花が咲くところを見るのはまた吉祥の兆しである。梁書巻七、張皇后列伝に、「高祖を生む前

に、庭にある菖蒲が花を咲き、あたりはこの世のものとは思えない光りが輝くのに、周りの人たちは誰も見えていない。皇后が菖蒲の花が咲くのを見た人は富貴になるといい、その花を摘んで、飲み込んだ。その月、高祖を出産した」という。[28]

宋代になると、菖蒲は端午詩にしばしば取り上げられるようになる。端午の日に菖蒲がないことを嘆く詩も出てくるくらい大事なものになっている。宋の梅堯臣は、

有酒不病飲、況無菖蒲根。空懐楚風俗、角黍弔沉魂。

（酒があってもむやみには飲まない、ましては菖蒲根がない。むなしく楚の風俗を懐かしみ、粽で屈原の魂を弔おう。）

と嘆き、そして、夕方漸く菖蒲が手に入り、喜んで杯を上げたのである。

端午晩得菖蒲

薄暮得菖蒲、猶勝竟日無。我焉能免俗、三揖向尊壺。

（夕方にやっと菖蒲を得た。一日中得られないよりはましだ。俗の風習を省くことが出来ようか、いや、出来るはずがない。三拝して、酒壺に向おう。）

同じ宋の余安行も「端午日無菖蒲」[29]と題して、端午の日はもう過ぎたのに、更に端午の詩を詠もうと。詩はささやかな時節物への拘りから人生無常と展開するが、端午日に菖蒲がなかったことが心に引っかかっている。端午日の菖蒲はかなり大事な役割を占めているのが分かる。しかし、ここで詠まれた菖蒲は、辟邪のためなのか、長命を願うためなのかは不明である。なぜならば、梅堯臣はまたこのような詩も詠んでいる。

佳人五色縷、道士絳囊符。瘦臂不中繫、百邪何用驅。

長命縷を結ぼうとしてもずり落ちるほど、臂が痩せ細くなった自分には、百邪を祓っても意味があろうか、という。百邪を駆除するのは、やはり、五色縷、赤符などである。上記梅堯臣、余安行の菖蒲からは何れも辟邪のイメージが感じ取れないのである。端午の風物として登場する菖蒲は唐詩に歌われた長命のイメージそのままのように思われる。

謝逸の端午絶句二首も然り。

白髮無端種種生、毎逢佳節只心驚。老妻稚子知人意、但把菖蒲酒細傾。

病臂懶纏長命縷、破衣羞帯赤靈符。樽中有酒不得醉、憶著三閭屈大夫。

（理由もなく短い白髪はたくさん増えてきたこの頃であるが、節句に逢うたびに心を驚かすものだ。老いた妻とまだ幼い我が子は自分の気持ちをよく知り、菖蒲酒を注いでくれる。病んでいる自分の腕に、長命縷を巻くのも面倒に思い、身にまとっているこのみずぼらしい服に靈符を付けるのも恥ずかしい。盃のなかに酒は入っているのに、

酔うこともなく、ただひたすらに屈原のことを追憶するばかりだ。）

辟邪の究極の目的は長命に繋がると言えば、この辺りはそれほど拘る必要もないかも知れない。

結　語

以上、唐五代までの、端午節の風物にまつわる詩作を通して見てきた。少ない詩作のほとんどが中唐以降の作であることに気づく。魏収の「五日詩」から玄宗皇帝の端午詩まで、実に百五十年もの歳月が流れ去ったのである。詠み人も荊楚地方に於いてを実際生活した経験のある人ばかりである。この時代の詩作に屈原や菖蒲などはあまり登場しないが、詩を通して、当時（中唐以降）競渡がすでに盛んに行われたことが分かる。しかし、この数の少なさは何を意味しているのか。

中国の文人は作詩の際に、とかく典故を求める。中唐まで、端午風物詩の典故になる依憑は少なくない。しかし、賜衣や長命縷など、この時代の詩作によく使われる素材の依り所は南北朝以前の書物が多い。都の長安にいれば、『荊楚歳時記』の記載を実体験する機会も乏しく、端午日の風物と行事は単なる書物の上の知識であると思われがちで、詩になりにくかったであろう。李白を含め、盛唐の詩人たちに、端午節に因む詩は一首もない。杜甫はもっぱら「賜衣」を詠む[30]。宋代に入ると、政治文化の中心が南に遷移したこともあってか、端午風物詩はかなりの数にのぼる。宋代以降は、風物詩のほかに、朝廷における年節の宴会で、盛んに翰林学士達に作らせて宮中に献上させ「帖（貼）子詩（詞）」の中の端午貼子詞もまた数多く作られている。この中では長命縷、角黍、菖蒲なども多く取り入れられている。しかし、

これらの「端午帖子詩」は本稿で言う端午風物詩とは異質なものであると考え、本稿には取り上げていない。これらの詩の考察はまた別の機会に譲ろう。本稿で例としてあげた宋代の詩作を見ても分かるように、宋代では、『荊楚歳時記』に記された五月五日の習わし、伝説などはすっかり詩の素材に定着している。民間の伝説、風俗を縒り集めて書物を成す。その書物が文人達の目に触れ、知識となる。その知識はまた詩人の生活経験を通して詩作の素材になる。歳月の流れと共に、詩に繰り返し詠まれるうちに定着するに至る。印刷術を持たない時代では、このプロセスは長い年月を要する。端午風物詩の場合はおよそ唐一代の歳月を費やしたであろう。

端午の風物詩が少ないもう一つ大きな要因は、やはり「女傷春、士悲秋」を底流とする中国文学の特質にあると思われる。詩に於いて、春、秋の詩作の数は、夏、冬のそれと比べものにならないほど量が多い。同じ一年の中にある一日、端午と中秋とを較べてみても分かると思う。五月五日については、早くも『風土記』に記述を求めることが出来るのに対して、八月十五日は宋の時代に出来た類書『太平御覧』、『文苑英華』に初めて現れるのである。『歳華記麗』にも八月十五日の項目はない。八月十五日の月を最初に詠んだのは杜甫であると言われている。[31] 確かに、杜甫以降の唐詩に中秋にまつわる詩作はかなりの数になっている。なるほど月は、およそ文人達が普段着としての詩を詠む際、最も己の心情を託すに相応しい風物であろう。八月十五日の月を詠んだのは杜甫以降とは言え、月自体は詩経からずっと詠まれ続けてきたのである。対して、端午日の諸々の行事は詩人達の心の琴線に触れるようなものはどれほどあったのか。競渡の狂宴に興奮し、譬え血の騒ぐ思いをしたにせよ、それはほんの一過性の庶民百姓のものに過ぎないのではないか。興奮はやがて冷めてしまい、蒲酒も赤符も長命縷も生活から遠ざかっていく。端午節の風物は、詩作に多くの素材を提供しているものの、端午その日に限られてしまい、端午日を過ぎれば、詩にする必然性もなくなる。文人達が作品の数を

意識的に操作しようとしたわけではないが、端午の風物は、月のように時・空に関わりなく、常に仰ぎ見ることは出来ないので、詩作が少ないのは極自然な結果だと思われる。しかし、詩作が少ないからと言って、端午節が持つ伝統の意味は、他の節句と較べて、何ら遜色はない。詩作の多い少ないに関わることなく、この節日の度に我々は語り継がれてきた言い伝え、物語、行事を同じように繰り返し、個人差はあっても、古人の心境に思いを馳せ、歴史の悠久さを体感して、そして、確実に次の世代に伝えていくであろう。

注

(1)『荊楚歳時記』に「五月俗稱惡月、多禁忌曝牀薦席、及忌蓋屋。五月五日謂之浴蘭節、四民並蹋百草之戲、採艾以為人、懸門戸上以禳毒氣、以菖蒲或鏤或屑以泛酒。是日競渡、採雜藥。以五綵絲繫臂、名曰辟兵、令人不病瘟又有條達等織組雜物、以相贈遺、取鴝鵒教之語。夏至節日食稷。」とある。『玉燭寶典』は、「競渡」には触れていないが、『風土記』『荊楚歳時記』『續齊諧記』の記述をすべて網羅し、角黍、俎亀などの食べ物の作り方をも詳しく記述している。

(2)『歳華記麗』の成立年は争議するところがあるが、本稿は守屋美都雄『中国古歳時記の研究』pp.184 ～ 194 の唐末五代の説に従う。

(3) 王筠（四八一～五四九）梁書列伝巻三十三列伝第二十七曰、「王筠字元禮、一字德柔、琅邪臨沂人。祖僧虔、齊司空簡穆公。父楫、太中大夫。」

(4) 現存の大戴禮・夏小正にはこの一文は見あたらない。

(5)『西京雜記』の作者、成立時代について、議論が分れるところであるが、程章燦氏が中國古籍大観『西京雜記』（成林、程章燦訳注、一九九七年台湾古籍出版）前言に、諸説を分析検討し、葛洪の著であると論じている。本論はこれに準じる。

(6) 隋書巻三十一「大抵荊州率敬鬼、尤重祠祀之事、昔屈原為制九歌、蓋由此也。屈原以五月望日赴汨羅、土人追至洞庭不見、

湖大船小、莫得濟者、乃歌曰、「何由得渡湖！」因爾鼓櫂爭歸、競會亭上、習以相傳、為競渡之戯。其迅楫齊馳、櫂歌亂響、喧振水陸、觀者如雲、諸郡率然、而南郡、襄陽尤甚。（下略）」

（7）注（1）を参照。

（8）魏收（五〇六～五七二）北魏書の編者。北齊書、北史に出る。北齊書曰「魏收、字伯起、小字佛助、鉅鹿下曲陽人也。」

（9）『續齊諧記』に「屈原五月五日投汨羅水、楚人哀之。至此日、以竹筒子貯米投水以祭之。漢建武中、長沙區曲、忽見一士人、自云三閭大夫。謂曲曰、聞君當見祭甚善、常年為蛟龍所竊。今若有惠當以楝葉塞其上以彩絲纏之、此二物蛟龍所憚。曲依其言、今五月五日作粽并帶楝葉五花絲、遺風也。」とある。

（10）全唐詩の検索は台湾故宮古典文献全文検索資料庫「寒泉2号」陳郁夫編を利用。以下、全唐詩の場合は同。

（11）揚州では五月五日に江の真中まで舟を出し、その舟の上で鋳た鏡が最も優れるものとされる。百錬鏡又は水心鏡、天子鏡などと名付けられている。鏡の背には龍などが彫られ、これを祈雨に使った伝説もある。舊唐書卷十二德宗（建中以前）「揚州每年貢端午日江心所鑄鏡」とある。以下、白居易の詩を参考に挙げておく。本稿はこの鋳鏡を取り上げない。「百錬鏡、鎔範非常規。日辰處所靈且祇、江心波上舟中鑄。五月五日日午時、瓊粉金膏磨瑩已、化為一片秋潭水。鏡成將獻蓬萊宮、揚州長吏手自封。人間臣妾不合照。背有九五飛天龍。人人呼為天子鏡。我有一言聞太宗。太宗常以人為鏡、鑒古鑒今不鑒容。四海安危居掌、百王治亂懸心中。乃知天子別有鏡、不是揚州百錬銅。」

（12）『冊府元龜』巻四〇、帝王部文学の欄に「（開元）十五年五月端午、宴羣臣于武成殿、各賜衣一副、自賦詩」とある。

（13）注（1）（9）を参照。

（14）五代馬縞『中華古今注』袴の項に「蓋古之裳也。（中略）至漢章帝以綾為之、加下緣、名曰口常。以端午日賜百官水紋綾袴、蓋取清慢而理人。」

（15）駱賓王には「揚州観競渡序」というものがある。作年は不明である。張説より先の作である可能性がある。

（16）沅江五月平堤流、邑人相將浮綵舟。靈均何年歌已矣、哀謠振楫從此起。楊桴擊節雷闐闐、亂流齊進聲轟然。蛟龍得雨馨鬣動、螮蝀飲河形影聯。刺史臨流蹇翠幃、揭竿命爵分雄雌。先鳴餘勇爭鼓舞、未至銜枚顔色沮。百勝本自有前期、一飛由來無定所。風俗如狂重此時、縱觀雲委江之湄。綵旂夾岸照蛟室、羅襪凌波呈水嬉。曲終人散空愁暮、招屈亭前水東注。

(17) 呉融の生没年は不詳であるが、昭宗龍紀元年（八八九年）進士に及第している。
(18) 李懐遠「凝碧池侍宴看競渡應制」、徐彦伯「奉和興慶池戯競渡應制」
(19) 「三月三日天晴明」から始まる薛逢の「觀競渡」がある。しかし、これは張建封の「競渡歌」とは初句（「五月五日天晴明」）が異なるだけで、二句目以下は全く同文である。この二首は何れも全唐詩に収録されている。この二首について詳しい考察を行っていない故、本稿は、薛逢の「觀競渡」を端午日でない日による競渡の詩として取り上げない。
(20) 瘟神（疫病神）送りの行事、すなわち「送瘟船」である。「送瘟船」に関して、黄強著『中国の祭祀儀礼と信仰』下巻第九章（p100 ～ p144）に詳しい。第一書房、一九九八年。
(21) 楚俗不愛力、費力為競舟。買舟俟一競、競斂貧者賕。年年四五月、繭實麥小秋。積水堰堤壞、拔秧蒲稗稠。此時集丁壯、習競南畝頭。朝飲村社酒、暮椎鄰舍牛。祭船如祭祖、習競如習讎。連延數十日、作業不復憂。君侯饌良吉、會客陳膳羞。畫鷁四來合、大競長江流。建標明取舍、勝負死生求。一時懽呼罷、三月農事休。（下略）
(22) 蕭結「批州符」、その序に「結、廬陵人、五代時為祁陽縣令、性不畏強禦。方暮春時、有州符下取競渡船、刺史將臨觀。結怒、批其符云云。守為止。」とある。
(23) 例えば、『文苑英華』巻五〇四判の歳時門に、「競渡賭錢判」というのがある。「揚州深江都縣人、以五月五日於江津競渡并設管絃、時有縣人王文身居父服、來預管絃、并將錢物賭競渡、因争先後遂折舟人臂。」
(24) 白居易「讀史五首」之一「楚懐放靈均、國政亦荒淫。彷徨未忍決、繞澤行悲吟。漢文疑賈生、謫置湘之陰。是時刑方措、此去難為心。士生一代間、誰不有浮沈。良時真可惜、亂世何足欽。乃知汨羅恨、未抵長沙深。」
(25) 『玉臺新詠』『文選』共に菖蒲の例が少ない。何れも長命などの意味を持たない。
(26) 抱朴子内篇巻二
(27) 現存の『風俗通』にはこの記述は見あたらない。
(28) 「后嘗於室内、忽見庭前昌蒲生花、光彩照灼非世中所有。后驚視、謂侍者曰、汝見不、對曰、不見。后曰、嘗聞見者當富貴。因遽取呑之。是月産高祖。」
(29) 「端午日已過、更吟端午詩。人間好時節、寂寞强追惟。有酒無菖蒲、青粽謾纍纍。昔人固所嗜、我今莫薦之。薄物尚如此、翻思淚交垂。」

(30) 杜甫には端午に因む詩が三首ある。第二節に引用した「端午日賜衣」の他、「惜別行送向卿進奉端午御衣之上都」と「長吟」がある。「長吟」を下に記す。「「江渚翻鷗戲、官橋帶柳陰。江飛競渡日、草見蹋春心。已撥形骸累、真為爛漫深、賦詩歌句穩、不免自長吟。」

(31) 全唐詩には李嶠（645 ～ 713）の中秋月二首を収録している。杜甫より先の作である。